

「イエスの声に聞く」

マルコによる福音書 9 章 2 節－ 1 3 節

森島 牧人 牧師

しばらくの間、マルコ福音書の終わりのところを読みながら、主の復活の証人として立てられた弟子たちから教会が生まれ、その教会が主の復活を告白する群れとして進むことになったこと、私たちも主の復活の証人として主の体なる教会に加えられた者であることなどを学んで来ました。今日は、それまで進めていたマルコ福音書の 9 章に戻り、読んで行きたいと思います。

最近私は健康のために自宅近くを歩いているのですが、その途中でお寺の看板をよく見かけます。そこには人生訓と言えるものが書かれていて、心ひかれるものもあります。私は長い間教師をして来ました。その中で、主イエスが単なる愛に満ちた立派な人物としてのみ聖書に書かれていたのだったら、学生たちへの説明はどんなに楽だったろうとよく思ったものでした。しかし聖書はそうではありません。聖書が説くのは、倫理でも人生訓でもなく＜福音＞です。それは、私たち罪深い人間は倫理や人生訓では救われないからです。マルチン・ルターが苦しみの中に「信仰によってのみ救われる」に到達したという有名な話がありますが、私たちの救いは、自分で制御出来る世界にあるものではなく、その外側にある世界からもたらされるものなのです。聖書は、主イエスが人間によって十字架にかけられ神によって復活させられた神の子・救世主であり、それに関する出来事のすべてが＜福音＞であると証言しています。人間には到底理解出来ない出来事、それこそが神の＜業＞だったからです。

ここで聖書は、私たちが福音の道を歩む時に必要な姿勢は、見るのではなく＜聞く＞という受動的な姿勢であると教えています。今日の聖書で高い山への同行を許されたペトロ、ヤコブ、ヨハネには受け止める従順な姿勢があったのでしょう。

主が三人を連れて登られた「高い山」とは、旧約のモーセがシナイ山で神の言・律法を与えられたように、神と人間が会う聖なる場所であり、同時に人間が最も低くされるところなのです。そしてさらには、そこで神と出会い、神からの示しを受けて下りて行く場所でもありました。

そのような場所に三人の弟子が立っているという今日の聖書箇所は「山上の変貌」と言われるところで、「イエスの姿が彼らの目の前で変わり、服は真っ白に輝き・・・」（マルコ 9：2－3）とあります。モーセがシナイ山を下りる時、彼の顔が光を放っていたとの記載や墓場で女たちに主の復活を告げる若者の白く長い衣など、これは一貫して神の力が人間に会う時の独特な現象で、そこには大きな意味があると思われま。というのは、高い山とは人間が登る場所ではなく、さらに高いところにおられる方が＜降りて来られる＞、聖なる場所だからです。

その場所で、預言者の代表者であるエリヤ、律法の代表者のモーセが主イエスと語り合っている・・・旧約と新約が出会い、古い契約が新しい契約に引き継がれる瞬間を表わしている場面と言えます。この時重要なことは、そこに神が＜声＞としておられるということです。余りのことに錯乱状態のペトロが三つの仮小屋をと口走りますが、それはそれぞれを偶像化して、自分たちの手の内に採りこみ、祀るということを意味していたからです。

しかし、その時「雲が彼らを覆い、雲の中から声がした。『これはわたしの愛する子。これに聞け。』彼らが急いで辺りを見回すと、そこにはただイエスだけが彼らと一緒にいられた。」（同 9：7－8）と聖書は書いています。「主イエスの声に聞く」そのことだけが残されていたのです。山の上に限らずどこにいても聞こえる主の声。耳を開いて主イエスの声に聞く者でありたいと願います。

（説教要約 羽入田悦子）